

達成度（評価）	
A	十分達成できている
B	おおむね達成できている
C	やや不十分である
D	不十分である

学校名	小城市立小城中学校
-----	-----------

1 前年度 評価結果の概要	<ul style="list-style-type: none"> 授業と家庭学習の連携を強化し、学力向上を目指す必要がある。 不登校対策のために、外部機関と連携や教育相談などを通し、生徒理解を図り、適切に対応できた教員が9割と高い割合である。 特別支援教育に対する理解をさらに深め、個に応じた支援の充実を図る。
------------------	--

2 学校教育目標	自他を認め合い、共に学び続ける生徒の育成
----------	----------------------

3 本年度の重点目標	<ul style="list-style-type: none"> 主体性をもち、正しい判断・行動ができる生徒の育成。（校内研究との連動） 情報交換を密にし、明るく前向きに取り組む職員集団の形成。 生徒理解、特別支援教育の充実。 ICT利活用の推進。
------------	--

4 重点取組内容・成果指標	中間評価	5 最終評価
---------------	------	--------

(1)共通評価項目				中間評価		最終評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	中間評価		最終評価	
				進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果
●学力の向上	●生徒が主体的に学びに向かうための「学習環境の整備推進」「学習方法の検討」	○生徒・保護者による学校評価アンケートで「落ち着いた雰囲気や学習できる」が8割以上とする。 ○「ペア学習・グループ学習・タブレット活用学習などさまざまな学習法がとられている」が8割を超える。	・授業に集中できるよう教室掲示物の精選、授業の流れの提示をする。 ・「授業のねらい」を達成できるよう、視点を明確にした学び合い学習に取り組む。	A	・授業の雰囲気は全体的に落ち着いた。「落ち着いた」は学習を進める上で必要。引き続き取り組んでいく。 ・各教科で生徒が協働することによる学びを推進している。今後は話し合いの質についても向上を図る。 ・つながるタイムを通じた交流を楽しみにしている生徒が多く、生徒会企画のつながるタイムも実施した。 ・職員研修によりICT機器の使用頻度は高まっている。教科の特性で使用に偏りが見られる。今後も研修を重ねていく。	B	・アンケートでは89%の生徒が「授業にめあてをもって意欲的に取り組んだ」にそう思う又は少しそう思うと回答。落ち着いた雰囲気の中で授業に取り組む生徒の割合が高い。 ・同時期実施の保護者アンケートでは、31%が総合的な学力が身につけていないと回答。授業の振り返りに関して、家庭学習で取り組むと良い内容を伝え、授業内容と家庭学習を結びつけていく指導に力を入れていく。
●心の教育	●児童生徒が、自他の生命を尊重する心、他者への思いやりや社会性、倫理観や正義感、感動する心など、豊かな心を身に付ける教育活動	○学校行事後の生徒アンケートで、自分の役割に対して意欲的に取り組めたと答える生徒の割合を80%以上にする。 ○自分の考えを伝えることができる、友達の意見を受け入れることができると答える生徒の割合を75%以上にする。	・学校行事で生徒に役割を与え、生徒が主体的に活動する場面を設定する。 ・教師から生徒だけでなく、生徒間での相互承認の場を設定する。 ・道徳での感想を掲示したり知らせたりする。 ・学習の場面で、ペア活動やグループ活動を設定し、自他の意見を伝え合う場面を設ける。	A	・体育大会、文化発表会などの行事で、実行委員を組織し、取り組んでいる。生徒会活動やクラスマッチ、卒業式に向けて引き続き取り組んでいきたい。 ・程度に違いはあれど、どの職員も考えを共有する時間を授業の中で意識的に設定することができるので、そのまま継続して取り組んでいく。授業参観で参考になると感じた取り組みは、各自の授業でも実践していく。 ・今年度は、各学年でつながるタイム係を作って活動している。3学期に1回あるので、活動内容の検討から生徒に企画させ、取り組みたい。活動の目的を明確にした。	A	・生徒のアンケート結果では、「学校行事やその他の諸活動で、互いに認め合うことができ、感想にそれに関する内容を記入することができた」と回答した生徒の割合が95.5%だった。
	●いじめの早期発見、早期対応に向けた取組の充実	○学校生活を楽しく過ごしていると回答する生徒の割合を95%以上にする。 ○相談事等、先生は丁寧に対応してくれると回答する割合を95%以上にする。	・アンケートの充実(月1回)と保護者との連携で、いじめを未然に防止する。 ・いじめに関する職員研修を行っていき、いじめに対する職員の意識を高める。 ・職員研修を通して、児童生徒にとって、分かる授業や自己有用感をもてる取り組みを実践していく。	A	・月一回の生活アンケートの情報を職員間で共有し、組織的に対応することができた。回答率は93%であった。 ・いじめに関する職員研修を通して、職員自らの対応について振り返りだけでなく、職員間で意見交換をしていくことで、いじめに対する知見を深めた。今後も継続して研修を行っていく予定である。	B	・生徒アンケートで「誰に対しても公平に接し、相手の置かれている立場を理解した言葉遣いや行動をとることができた」と回答した生徒の割合は95%だった。
	○児童生徒が夢や目標を持ち、その実現に向けて意欲的に取り組もうとするための教育活動。	●「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」と回答した児童生徒85%以上 ●「将来の夢や目標を持っている」について肯定的な回答をした児童生徒85%以上	・キャリアサポートに、進路実現にむけての情報(職業調べ・職場体験・マナー検定・高校説明会)をまとめさせる。 ・地域教材を利用した教科や総合的な学習の時間の充実を図る。	A	・総合的な学習の時間や学校行事等を通して、生徒自身の将来について考える時間を作ることができた。今後は、その具体化や実現に向けて、更に手立てを講じていくことを要する。 ・キャリア形成と自己実現に向けた取り組みについては、各学年や各学級、授業等で適宜提案できている。今後は、全校一斉方式で取り組めることを模索し、校内研究などと関連付けていく必要性もあると考える。	A	・様々な学校教育活動で、目標を設定し取り組むことで人間関係の構築や努力したことへの達成感を感じている生徒が多かった。次年度も生徒が活躍できる場や生徒・教員・地域の方から賞賛される場を継続して設けていきたい。
	○人権・同和教育の充実	○教科担任と学級担任、副担任等が連携して差別や人権に関する授業を年間に1回以上は行う。	・社会科で差別や人権に関する授業を実施する際は、事前に学年で検討会を設け、教科担当と学級担任、副担任等が連携した授業を行う。	A	1学期、2学年の社会科で「江戸時代の身分制度」の単元で隠語を扱い、その後、担任による道徳授業でフォローアップした。2学期は、3学年の社会科「平等権」の授業に合わせて、第五福竜丸を題材にした差別を解消する道徳授業を行った。3学期には、1学年の社会科「室町文化」の単元に合わせて、担任による道徳を行う予定である。	A	・「誰にでも公平に接し、相手の置かれている立場を理解した言葉遣いや行動をとることができた」と答えた生徒が95%であった。「学校は、年間を通して、差別や人権に関する授業を実施している」と思う保護者の割合が90.5%であった。来年度も計画的に人権・同和教育の充実へ努めたい。
●健康・体づくり	●「望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成」	●「健康に良い食事をしている」児童生徒80%以上	・給食時間の放送、給食指導、食育授業、各種便りを通して、朝食の大切さについて理解させる。また、県の早寝・早起・朝ごはんの資料を活用し、家庭との連携を図る。 ・保健だよりや掲示物等の活用、保体委員会と連携を図りながら学校保健活動を行う。 ・保健の授業で運動と食事の重要性について指導を行う。 ・また、長期休みの過ごし方や運動習慣についての通信を発行する。	B	・各種便り、食育授業、掲示等を中心に、望ましい食生活について指導を行っていると感じている職員の割合は、そう思う、少しそう思うを合わせると、97%であった。 ・朝食を1品以上食べている生徒の割合も92%であった。 ・保健便りの活用や、感染症対策などを通じ、個人の健康管理が、みんなの健康を守る行動につながるよう指導を行っていると感じている職員の割合は、そう思う、少しそう思うを合わせると、93%であった。 ・生徒の生活習慣アンケート結果や保健室来室者の様子から、生活習慣の乱れは本校の課題であると感じているため、生徒だけでなく、家庭との連携も工夫していく必要がある。	A	・望ましい健康な生活について学ぶことができた生徒は94%であった。次年度も情報発信とともに、生徒会活動と連携し、保健教育を充実させたい。 ・感染症が広がらないように意識して生活を送ることができた生徒は95%であった。昨年度よりも学級閉鎖の数を減らすことができた。教室の常時換気換気を徹底したり、職員や生徒にこまめに情報発信をしたことが効果的であったと考えられるため、次年度も継続して取り組んでいきたい。
	●「健康を考えて行動できる能力の育成」	●「健康は何より大切だ」「保健で学習したことを、自分の生活に活かしている」と答えた児童生徒80%以上	・部活動ガイドラインに沿って、練習時間、休養日を遵守する。定時退勤を促す。 ・定期テスト、始業式や終業式の午後には会議を入れずに年休取得推進日とする。 ・校務支援システムの有効活用を推進する。 ・毎週実施している企画委員会でも、時間外勤務の状況を知らせ職員間で共有し改善を図る。 ・人間ドックなどの再検査を必ず受診させる。	B	・部活動ガイドラインに沿って、練習時間、休養日を遵守することができた。定期テスト、始業式や終業式の午後には会議を入れずに年休取得推進日にすることができた。	B	・時間外在校等時間の上限の順守ができていない職員がおり、100時間以上になった職員もいた。 ・年間を通して、部活動では、平日1日・休日1日の休養日の設定をすることができた。また、始業式・終業式等では、午後に会議を入れずに年休取得推進日にすることができた。
●業務改善・教職員の働き方改革の推進	●業務効率化の推進と時間外在校等時間の削減	●教育委員会規則に掲げる時間外在校等時間の上限を遵守する。	・毎週実施している企画委員会でも、時間外勤務の状況を知らせ職員間で共有し改善を図る。 ・人間ドックなどの再検査を必ず受診させる。	B	・仕事の効率化を図るために、校務分掌で分担し組織的・計画的に取り組むことができた。	A	・年間を通して、全職員で協力しながら、校務分掌で分担し組織的・計画的に取り組むことができた。
	○教職員の健康管理に関して、働きやすい職場体制づくり	○職員アンケートで、校務分掌は分担し、組織的・計画的に取り組む職員の割合を85%以上にする。	・SC部会や長期休業中の研修などを実施して、全職員が特別支援教育に関する正しい知識に基づいて教育活動を行う。	A	・中間アンケートでは、「特別的教育課程に対する理解を深め、適切な運用を行って生徒支援に努めた」と肯定的に答えた教職員の割合が8割を超えた。今後は来年度の学級編成を見据え、職員の理解をさらに進めたい。	A	・保護者アンケートでは、学校の特別支援教育の取り組みについて、89%が肯定的に捉えている。来年度は特別支援学級数がさらに増加するため、今年度の取り組みをベースに更なる支援体制を構築していきたい。

(2)本年度重点的に取り組む独自評価項目				中間評価		最終評価	
評価項目	重点取組内容	成果指標 (数値目標)	具体的取組	中間評価		最終評価	
				進捗度 (評価)	進捗状況と見通し	達成度 (評価)	実施結果
○不登校対策の充実	○不登校未然防止対策と不登校支援の充実	○未然防止のため教育相談アンケートを年に2回実施分析を、傾向を把握する。 ○2回目のQUアンケートの学校生活満足度の生徒の割合を年度当初より上回る。 ○教室に入れない別室登校生徒の進路実現を図る。	・教育相談週間の充実とその後の迅速な生徒対応を図る。 ・校内教育支援センター「スマイルルーム」、SC、SSW、SSF、福祉課など関係者による情報交換会の実施及び関係機関との連携を図る。 ・職員研修を実施する。 ・校内教育支援センター「スマイルルーム」と教育相談担当、担任、学年職員が連携しながら支援する。	B	・「校内支援センターや外部機関と連携して不登校生徒の支援を行った」「定期教育相談やQ-Uアンケートを活用し、生徒の悩みに適切に対応した」の質問に対して、「そう思う」「少しそう思う」の合計が2つとも90%であった。どこでも連携できていない不登校生もいるので、卒業後もつながっていく適切な支援先を提案していきたい。2回目のQ-Uアンケートでは、2.3生は学校生活満足度が1%上がっていたが、1年生は8%下がっていた。さらに細やかな対応をしていく必要がある。	B	・アンケートでは、82%の生徒が「先生たちに悩みや今の気持ちを話すことができた」と答え、86%の保護者が「学校は生徒の悩みや相談事に適切に対応している」と答えた。 ・スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーに新たにつながったり、校内教育支援センターに新たに入級し、登校できるようになったりしたケースも増えた。SSFや小城市教育支援センターを活用し、個々に応じた支援をさらに充実させていきたい。
○ICT利活用の推進	○タブレットを有効に活用できる生徒の育成・教育活動の充実	○未然防止のため教育相談アンケートを年に2回実施分析を、傾向を把握する。 ○2回目のQUアンケートの学校生活満足度の生徒の割合を年度当初より上回る。 ○教室に入れない別室登校生徒の進路実現を図る。	・利用の仕方や保管方法などを見直し、必要な時にすぐに利用できる環境を作る。 ・学校行事でタブレットを活用する場面を多く設定する。	B	・中間評価における質問「タブレット利用の仕方を見直し、必要な時にすぐに利用できる環境や機会などを作ることができた」「そう思う」「少しそう思う」の合計が77ポイント、質問「学校行事でタブレットを活用する場面を多く設定することができた」が「そう思う」「少しそう思う」の合計が66ポイントだった。肯定的な評価が高かった。タブレットの有効活用のため、課題発見や課題解決など能力伸ばすための手立てを工夫、改善が必要である。	A	・「学校ははなまる連絡帳等のICT機器を活用した効果的な情報発信・情報共有に取り組んでいる」に対して、96.2%の保護者が肯定的だった。 ・「学びの中で、ICT機器を効果的に活用することができた」に対して、93.3%の生徒が肯定的だった。 ・目標とする割合には、保護者と生徒が目標値の80%を超えることができた。

●…県共通 ○…学校独自 ◎…志を高める教育	
5 総合評価・次年度への展望	<ul style="list-style-type: none"> 家庭学習への取り組み方を再考する必要がある。(課題の出し方、習慣づけ等) 研修等を通して特別支援教育に関する職員の理解は深まっている。 業務改善・働き方改革に関して一歩踏み込んだ対策が必要である。